

旧制水戸高等学校を創立した経済人

常磐自動車道水戸ICを下車し、国道50号を水戸市街地方面に向かう。水戸市東原二丁目の自由ヶ丘交差点を左折。県道を進むと、右側に北水会グループの医療・福祉・教育の複合エリア「水高スクエア」(同市東原三丁目)がある。出入り口付近にその碑は建っている。

碑の名称は「旧制水戸高等学校跡」。同校は本県の教育振興に多大な影響を与え、戦後日本の政財界を牽引した著名人を数多く輩出した。また、戦後の学制改革で誕生した茨城大学の母体となった。

この水戸高等学校を創った人物こそ、茨城県が生んだ実業家、内田信也(1880-1971)である。船舶事業で巨額の富を築いた後は、代議士となり、第5次吉田内閣の農林大臣などを務めた。この間、慈善事業も手掛けた。同校創設は、その金字塔となっている。

内田信也(以下内田と略)は、明治13年(1880)、行方郡麻生町に生まれた。5歳の時、父母とともに東京に移り、麻布中学卒業後、東京高等商業学校(現一橋大学)に入学した。

内田は当時、校長だった矢野二郎宅を度々、訪問していた。

内田は自著『風雪五十年』の中で、「矢野先生は、常に昼飯は何人前もの洋食を用意されて、客を接待したものだ。僕はこの洋食を食べたいのと、矢野翁の実物教育に接したいため、よく先生の邸を訪ねた」と書いている。

洋食の話は愛嬌としても、内田は人の世を成り立たせている「実物」の「教育」に強い関心を抱いていたようだ。

大学卒業後は、三井物産(株)に入社。神戸支店船舶部勤務となる。内田は「病気の際は宿直室に泊り込んで」(『風雪五十年』)働くほど精励した。

転機は大正3年(1914)にやってきた。三井物産を辞め、神戸市に「内田汽船株式会社」を設立したのである。第一次世界大戦勃発による船舶需要を見込んでの決断だった。

船の所有者と傭船契約を結び、必要な人に船を貸すことで利益を得る事業を始めた。これが当たった。造船事業にも乗り出し、短期間

内田信也

に巨額の富を築いた。

そんな最中、茨城県の力石雄一郎知事(当時)が神戸市須磨の内田邸を訪れた。知事は「茨城県民を代表して伺った」と切り出した。

その時の様子を内田は『風雪五十年』の中でこう記す。「力石君のその時の話は、是非百萬圓の寄付をして水戸高等学校を建ててくれというのであったが、僕はその場で快く承諾した」と。

政府は当時、高等学校増設のため法令を改正、水戸にも高等学校建設の計画を進めた。しかし、建設費100万円のうち、地元負担の60万円の確保が難しかったのである。

内田の快諾を得て大正8年(1919)、国は東茨城郡常磐村(現水戸市)に約89,000㎡の土地を買収し、大正9年1月、建設工事に着手、同年4月、水戸高等学校設置の公布がなされた。200人の新入生が通い始め、校舎等は開校から3年を経て完成した。

昭和43年(1968)、水戸高等学校の卒業生であった岩上二郎茨城県知事(当時)は「多額の私財を投じ茨城大学の礎を築かれ本県高等教育の進展に大きく貢献されました」と、内田

の「卓絶した功績」を称え、特別功績者として表彰。それから3年後、昭和46年(1971)、内田は92年の「風雪」の生涯に幕を閉じた。(文中敬称略)

主な参考文献

『風雪五十年』(内田信也著、昭和26年発行)、『特別功績者小傳』(昭和44年、茨城県編集発行)、『内田信也』(昭和48年、内田信也追想録編集委員会発行)。



「水高スクエア」敷地内に建つ旧制水戸高等学校跡の記念碑=水戸市東原三丁目(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「実学に学ぶ」